

腰部脊柱管
狭窄症

患者の不安を共有。症状と 診察での的確に病態を把握

桑園整形外科

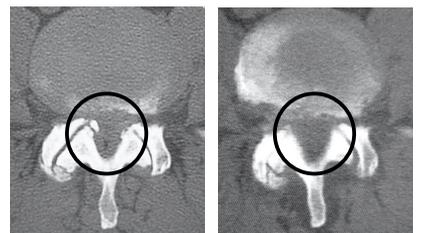
札幌市中央区北8条西16丁目
〒011-6333-3636 <http://www.dr-azuma.net>

本間信吾 副院長

◎ほんま・しんご/1971年北大医学部卒業。北大医学部整形外科医局入局。79年アイオワ大学留学（脊椎ハイオメカニクス）。80年札幌市立札幌病院整形外科に勤務。同年博士号取得。2009年桑園整形外科副院長に就任。日本整形外科学会認定医。日本リウマチ登録医。日本整形外科学会学会脊椎・脊髄認定医。日本整形外科学会などの役職を歴任。



スタッフのフォローも診察には重要



狭くなった脊椎管（黒丸内）を手術により拡張（右）

手術をしない保存治療を優先し、患者の体に負担をかけない治療を実践している桑園整形外科では、膝関節疾患専門の東裕隆院長と脊椎疾患専門の本間信吾副院長の2人の専門医が診療にあたっている。

2009年4月に同院の副院長に就任した本間副院長は、市立札幌病院で整形外科部長を務め、5000例にも及ぶ脊椎疾患手術を



来院者に優しさと温もりを与える工夫を取り入れた待合室

手掛けるなど、豊富な臨床経験を誇る脊椎疾患のスペシャリストだ。人間の8割が経験するといわれる腰痛は、ストレスや姿勢のゆがみなど、原因や症状は人それぞれである。中でも最近増えている

腰部脊柱管狭窄症は、加齢による骨や椎間板の老化、肉体的労働などが原因で、神経の通り道である脊柱管が狭くなり、神経を圧迫。歩くと下肢の痛みやしびれが起き、休むと軽減する間欠跛行が主な症状として現れ

「自覚症状と診察で、患者の病態を的確に診断することが重要です。患者さんの訴えをよく聞き、不安を共有し、解消することによって症状が改善することもあります」と本間副院長。脊柱管が狭くなっている状態でも、症状がない場合もあるという。メンタル面のケアを重視した診察を中心に、予防として日常生活での姿勢や運動のアドバイ

スを行い、症状がある場合には、運動療法などの保存治療を併用している。他院で手術し、症状が改善しないなどの理由で受診する患者も多く、画像診断に頼りすぎ、すぐに手術を選択するのは危険だと警鐘を鳴らす。「わたしも年間100例程度の手術を行います。あくまで手術は最終手段であり、利点と欠点を患者さんに十分理解してもらったうえで慎重に検討しています」と本間副院長。また、優れた診察や手術技術を伝えるべく、他院の整形外科医師への技術指導を行っている。